

村上春樹「風の歌を聴け」に現われる〈食〉

——蔓延する「ビール」と、ものさしとしての「冷蔵庫」——

松本海

村上春樹は「風の歌を聴け」（初出：『群像』一九七九年六月）で第二回群像新人文学賞を受賞し、作家として本格的にデビューした。村上作品には数々の〈食〉が描かれるが、「風の歌を聴け」も例外ではない。主人公「僕」や友人の鼠がいたるところで飲む「ビール」を筆頭に、ラジオDJや鼠が摂取する「コーラ」、子供時代の「僕」が食べる甘い物、「3番目の女の子」と食べる「サンドウィッチ」など、数多くの〈食〉が現れる。また、比喩のレベルでも「グレープフルーツのような乳房」を付けた女などが登場する。

丸谷才一が「村上春樹さんの『風の歌を聴け』は現代アメリカ小説の強い影響の下に出来あがつた¹⁾」と評したように、多くの批評家や論者が「風の歌を聴け」と「アメリカ」との強い関係性を指摘するが、上田三四二が「風の歌を聴け」について、「食べ物だって、大抵かたかなのものが出てくるし、また、物の名に非常にかたかなが多い²⁾」と発言するように、食を中心とした度重なる横文字の羅列が「アメリカ」文化の流入を常と感じさせていたことは間違いない。

だが、「風の歌を聴け」における〈食〉は「アメリカ」的なものを漂わせるための単なる飾りのようなものであるのだろうか。

本論ではまず、本作において特に頻出する「ビール」を中心として〈食〉に焦点を当て、テキストの中でどのような機能を果たしているのか分析する。また、村上作品には〈食〉と並行するように、多種多様な形で「冷蔵庫」も多く描かれているが、本作においても「冷蔵庫」が少なからず登場する。高度経済成長期の急速な発展と歩みを共にするかのようには、「冷蔵庫」は短期間で飛躍的に改良が加えられていった。「僕」が描かれる三つの時代（一九七八年、一九七〇年、それ以前）と、それぞれの時期の「冷蔵庫」がどのように描かれているのか、社会背景などを確認しながら分析することにより、「僕」のそれぞれの時代の位相を確認する。

「ビール」や「冷蔵庫」を中心に、「風の歌を聴け」に現れる〈食〉の特徴を捉えたうえで、こうした〈食〉が本作においてどのような意義を持っているのか検証していくのが、本稿の目的である。

※「風の歌を聴け」本文の引用は（初出誌：『群像』一九七九年六月）を用い、引用の際には（ ）内に章を示した。

一 「ビール」の蔓延

「風の歌を聴け」では数多くの場面で主人公や鼠がジェイズ・バーを拠点としてビールを飲む。

1 夏にかけて、僕と鼠はまるで何かに取り憑かれたように25メートル・プール1杯分ばかりのビールを飲み干し、「ジェイズ・バー」の床いっぱい5センチの厚さにピーナツの殻をまきちらした。そしてそれは、そうでもしなければ生き残れないくらい退屈な夏であった。(3)

ビールは退屈さと等価のものとして現われ、本文中に幾度となく現われる。鼠との出会いの際にも、「近くの自動販売機で罐ビールを半ダースばかり買って海まで歩き、砂浜に寝ころんでそれを全部飲んでしま(4)」い、儀式のように二人は共にビールを飲んでいる。土居豊は『風の歌を聴け』には、缶ビールについての印象的な描写がたくさん出てきます。けれど、缶ビールは、実は単なる記号で、別にウーロン茶でもいいのです⁽³⁾と述べるが、ビールを烏龍茶と代替可能な「単なる記号」として扱ってはいけなからう。

日本国内において、ビールは一九五九年に酒類別の出荷量で一位

となり、一九六三年には全酒類の出荷量の過半数を占めて、電気冷蔵庫の普及と共に家庭でも冷えたビールが飲まれるようになっていった。⁽⁴⁾市民権を得た普遍的な飲料として、まずビールは捉えらるる。

さらに二人が「自動販売機」で「罐ビール」を買った点に注目する。日本国内では、「缶ビールの発売から5年後、1963年に缶ビールの自動販売機が発売された。当初はあまり普及が進まず、自動販売機の設置が本格化するのには、1970年代になってからであ⁽⁵⁾り、自動販売機の設置は一九七一年～一九七三年に第一次ピークが訪れた。「僕」と鼠が出会った一九七〇年当時においては「罐ビール」の「自動販売機」は新しい風俗であり、一九七八年の執筆時の「僕」にとっては新鮮な出来事として思い出されていたはずである。

また「僕」と鼠がジェイズ・バーで話し合う以下の部分は、ビールという飲料の持つ特徴について示唆的である。

「何故本なんて読む？」

「何故ビールなんて飲む？」

僕は酔潰けの鰯と野菜サラダを一口ずつ交互に食べながら、鼠の方も見ずにそう訊き返した。鼠はそれについてずっと考え込んでいたが、5分ばかり後で口を開いた。

「ビールの良いところはね、全部小便になって出ちまうことだね。ワン・アウト1壘ダブル・プレー、何も残りゃしない。」

鼠はそう言って、僕が食べつづけるのを眺めた。(5)

アルコールが持つ利尿作用により、体内に何も残らないことを鼠は強調する。「ビール」の持つ意味として、変化することのない停滞感が含有されている。「僕」や鼠の行き場のない思いを象徴するように、本作内では常にビールが現われ続けるのである。三浦雅士は上記の引用について「鼠は「僕」に「何故本なんて読む？」と問いかける。それに対して「僕」は「何故ビールなんて飲む？」という問いで答える。最初の問いは相手の気持ちを探ろうとしているのだが、後の問いはその問いを遮断しようとしている。(中略)本を読むこともビールを読むことも大差ない、いずれも大きな問題ではありえないのだからという考え方を示唆している」と述べるが、さらに言えばビールが会話の進展を防いでいると考えられる。ビールは物事が前に進むことを拒絶するような、強い意味合いを持つた飲料であると考えられる。鼠が自身の小説について語る以下のような場面にもビールの停滞感は現われている。

「そのうちに夜が明けてきた。(これからどうするの?)」って女が俺に訊ねる。(私は鳥がありそうな方に泳いでみるわ)って女は言うんだ。でも鳥は無いかもしれない。それよりここに浮かんでビールでも飲んでれば、きつと飛行機が救助に来てくれるさ、って俺は言う。でもね、女は一人で泳いでいっちゃうんだ。」

鼠はそこで一息ついてビールを飲んだ。

村上春樹「風の歌を聴け」に現われる〈食〉

「女は2日と2晩泳ぎつづけてどこかの島にたどりつく。俺は俺で二日酔いのまま飛行機に救助される。それでね、何年か後に2人は山の手の小さなバーで偶然めぐりあうんだな。」

「それでもまた2人でビールを飲むんだろ？」
「悲しくないか？」

「さあね。」と僕は言った。(5)

生きるため積極的に行動する女とは対照的な、無気力な鼠の様子をビールが際立たせている。

このようにビールが停滞感を表している中で、ビールの他の飲料が出てくる際には、逆に何かしらの「変化」の兆しを読みとることができる。鼠が「僕」に、「女」と会う際に同席してくれるよう頼む場面では、鼠はビールを頼まない。

その夜、鼠は一滴もビールを飲まなかった。これは決して良い徴候ではない。そのかわりに、ジム・ビームのロックをたてつ

づけに5杯飲んだ。(24)

鼠にとって、今まで会おうとしなかった女性へ向き合おうとしており、変化の兆候がみられる場面である。いつも飲んでいるビールから脱却し、変化を求めてバーボンであるジム・ビームを鼠は飲んでると考えられる。しかしバーボンを含むウイスキーは「僕」にとって特別な意味合いを持っている。

「僕の友だちに急性アルコール中毒で死んだのがあるんだ。ウイスキーをがぶ飲みした後でさよならって別かれてから歩い

て家まで帰ってね、歯を磨いてパジャマに着替えて寝たのさ。
朝になったら冷たくなって死んでたよ。立派な葬式だったな。」

(9)

ウイスキーは、ここでは「死」を匂わせるものとなっている。「僕」が鼠に対して「良い徴候ではない」と答えるバックグラウンドには、こうした「僕」の認識がある。「小指のない女の子」と「僕」との出会いにもウイスキーが関与している。

彼女は首までひっぱり上げたタオル・カバーにくるまって、胃の底に残ったウイスキーの匂いと闘いながら無表情に僕を見上げていた。(9)

ウイスキーを大量に飲んだ「小指のない女の子」は翌朝「死にそうよ。」と発言する。「小指のない女の子」自身の死の描写はないが、後に墮胎することへの伏線となつていふと言えよう。

作中で「小指のない女の子」が飲むのは、ウイスキー、ジンジャーエール、ワイン、コーヒ、ブラデー・マリーであり、ビールを飲むことはない。鼠の書く小説に出てくる女の子のように、行動する人物として読み取ることが出来る。ビールばかり飲んで行動を起こそうとしない「僕」とは対比的に描かれていると共に、一方で「僕」は小指のない女の子と交流を持つていくなかでビール以外の飲料も口にするようになり、徐々に他者と連帯をしようと変化をしていくように見受けられる。「僕」が彼女と共にワインを飲む場面もあり、「僕」を変化させる存在として「小指のない女の子」を

読みとることが出来る。しかし、結局彼女と「僕」は深い繋がりを持つことはない。彼女の墮胎の話聞いた「僕」は、体を重ねることもなく、ビールを欲する。

彼女は僕の背中に回した腕の力をもう一度強めた。僕はみぞおちのあたりに彼女の乳房を感じた。たまたまなくビールが飲みたかった。(36)

山田夏樹はこの場面について、「不可能な性と「ビール」——「25メートル・プール一杯分ばかり」と数値化されていたもの——を並置して語ることが、「彼女(引用者注・3番目の女の子)の死」と「6922本めの煙草」を並置して語った構図の反復であることは言うまでもない」と述べるが、さらに言えば、心が通じる予兆を感じ変化を期待していた「僕」であったが、結局その試みが失敗すると、その日は飲んでいなかった「ビール」を飲むことで、停滞した元の世界へと戻ろうと希求するのである。

一瞬見せた「僕」の変化の兆しは、その後どうなつて行くのか。そんなわけで、僕は時の淀みの中ですぐに眠りこもうとする意識をビールと煙草で蹴とばしながらこの文章を書き続けている。(30)

僕と妻はサム・ペキンパーの映画が来るたびに映画館に行き、帰りには日比谷公園でビールを2本ずつ飲み、鳩にポップコーンをまいてやる。(39)

以上二つの引用に挙げたように、二十九歳になった「僕」は相変

わらずビールを飲んでおり、大きな意味では変化することなく時を過ごしてしまったことを示している。個人としての変化の無さ、停滞は、後述する「冷蔵庫」の変化とは対照的なものとなり、より一層その虚無感が引き立つ仕掛けとなっている。

二 空腹と消化不良

「ビール」の停滞感とともに、「風の歌を聴け」では消化不良や空腹など、登場人物が食に関して不快を訴えている場面が度々ある。少年時代の無口な「僕」を心配して、両親は精神科医のもとへ「僕」を連れていく。

君はしゃべりたくない。しかしお腹は空いた。そこで君は言葉を使わずにそれを表現したい。ゼスチュア・ゲームだ。やってごらん。

僕はお腹を押さえて苦しそうな顔をした。医者は笑った。それじゃ消化不良だ。

消化不良……。(7)

「空腹」を示すことができずに、「消化不良」とされてしまう「僕」は自分の真意が伝えられておらず、コミュニケーションの齟齬が生まれてしまっている。石倉美智子は「風の歌を聴け」の後に出てくる「3番目の女の子」との会話において現われる「空腹」について「空腹」は「僕」の内面の満たされなさをあらわしている。だから

村上春樹「風の歌を聴け」に現われる〈食〉

その「空腹」はただ満たせばすむという類いのものではない⁽⁸⁾と述べるが、こうした指摘はヒッピーである「2人目の女の子」と「僕」のやりとりからも裏付けることができる。腹をすかせている「2人目の女の子」に「僕」は食料を与えて一週間ほど自宅に住まわせていたが、ある日机の上に「嫌な奴」と書いたノートの切れ端を残して「2人目の女の子」は消えてしまう。これは、「空腹」を満たすことに内面の充実を考えていない「2人目の女の子」と、「空腹」を満たすことで満足を与えられていたかのように錯覚してしまった「僕」との齟齬が見て取れる場面である。「空腹」とは単なる欠落にとらえるべきであろう。そうした中で、幼少期の「僕」が「空腹」を上手く他者に伝達できないということは、他のものへの欲求をうまく表出することができない一九七〇年の時点での「僕」にも繋がる部分である。「空腹」については「3番目の女の子」とのやりとりの中でも重要となってくる要素であるが、これについては後の章で詳述する。

では一方で「消化不良」とは何を現しているのか。「僕」にハートフィールドの本をくれた叔父が「腸の癌を患い、体中をずたずたに切り裂かれ、体の入口と出口にプラスチックのパイプを詰め込まれたまま苦しみ抜いて死んだ(1)」ことから、「消化不良」は決して軽いものではない。ある種の「消化不良」が、「僕」と「小指のない女の子」のレストランでの会話でも現われてくる。

「去年ね、牛を解剖したんだ。」

「そう？」

「腹を裂いてみると、胃の中にはひとつかみの草しか入ってはいなかった。僕はその草をビニールの袋に入れて家に持って帰り、机の上に置いた。それでね、何か嫌なことがある度にその草の塊りを眺めてこんな風に考えることにしてるんだ。何故牛はこんなまずそうで惨めなものを何度も何度も大事そうに反芻して食べるんだろうってね。」(35)

一見すると冗談かのような「僕」の発言は実は本当であり、一九七八年の時点でもそれを所持していることが後に明らかとなる。

レコード棚の隣りには机があり、その上には乾いてミイラのようになった草の塊りがぶらさがっている。牛の胃袋から取り

出した草だ。(39)

この「草の塊り」について前田愛は「牛の胃の中に入っていた草の塊りは、彼女の内面の喩であり、そしてまた「僕」の内面の喩でもある。誰もが惨めな内面を抱えているという事実をあきらめととも受け入れるか、あるいはそれゆえにお互いに内面をひらいてみせることに救いを求めるか、この二つの選択肢からどちらをえらぶかは、「僕」の場合自明の理に近い⁹⁾と述べ、「僕」が前者しか選べないことを指摘する。「反芻症」という症状があるように、人間にとつて「反芻」のような行為は「消化不良」の一種として捉えられる。しかし「僕」はこの「反芻」のような行為に羨望を抱いている。「草

の塊り」とはここでは、他者からみれば、何の満足をも与えないがしかし、自分にとっては大きな満足を与えるものとして考えられる。牛はこうしたわずかな希望のようなものをしっかりと順を追って「消化」することができず、「僕」はうまくそうした段階を踏むことができない。喪失から生まれる欲求を満たすための物事を、「僕」はうまく「消化」することができず、「消化不良」の状態へと陥ってしまっているのである。

精神科医の場面に当てはめれば、「僕」の抱えている問題は「空腹」が示すような他者への欲求が欠如していることそのことではない。問題は、そうした欲求自体はあるのだが、他者にうまく伝わらないという点であり、欲求を解消していくためのプロセスをうまく踏んで「消化」することができないということにある。

随所に現われる「消化不良」も、たちまち体の中を通り過ぎてしまい栄養分を摂取することができないビールと呼応していると言つてよいであろう。

三 さまざまな冷蔵庫

日本では一八九九年の時点では東京・京橋のビアホール「恵比寿麦酒」で「爛ビール」等が売られていたこともあるが、冷蔵庫の普及に伴いビールは冷やして飲むことが慣例となった¹⁰⁾。ビールと親和性の高いものとして冷蔵庫はある。

「風の歌を聴け」の冒頭では「僕」が文章を書くことについて述べる。作家ハートフィールドの「文章をかくという作業は、とりもなおさず自分と自分を取りまく事物との距離を確認することである。必要なものは感性ではなく、ものさしだ。(1)」という文章を「僕」は引用している。またその後の一節には、「夜の3時に寝静まった台所の冷蔵庫を漁るような人間には、それだけの文章しか書くことはできない。そしてそれが僕だ。(1)」と自虐的に自身を語るが、傍らには冷蔵庫があることが示されている。一方でこの文章を書いている時点の「僕」と重なるような、一九七〇年の「僕」が描かれている場面がある。「僕」が鼠から「優れた知性とは2つの対立する概念を同時に抱きながら、その機能を充分に發揮していくことができる」といったロジェ・ヴァティムの考えが本当かどうか「僕」に尋ねた際、「夜中の3時に目が覚めて、腹ペコだとする。冷蔵庫を開けても何も無い。どうすればいい？(16)」と「僕」は答え、またビールを飲み始める。ここからは、「2つの対立する概念を同時に」書く、すなわち「完璧な文章(1)」を書くことができないと考える「僕」の態度と反響していることが窺える。また同時に、一九七八年の「僕」からすれば、当時の「事物との距離を確認する」ためのメルクマール、「ものさし」として冷蔵庫が機能していると言えるであろう。この場面以外にも、冷蔵庫は数多く現われる。ラジオDJのトークの中でも冷蔵庫が語られる。

「そう、ラジオ。文明が産んだ……ムツ……最良の機械だ。電

村上春樹「風の歌を聴け」に現われる〈食〉

気掃除機よりずっと精密だし、冷蔵庫よりずっと小さく、テレビよりずっと安い。君は今何してた。」(12)

ここでは冷蔵庫の大きさが取りあげられている。石倉は「風の歌」には「冷蔵庫」がしばしば登場する。「僕」およびキャラクターの内面が暗に食物で表現されることと無関係ではないだろう⁽¹¹⁾「また、冷蔵庫という比喩は、「僕」というキャラクターを表現している。ちょうど「僕」の好んで飲むビールが、冷蔵庫とは切っても切れない関係であるように、「僕」と冷蔵庫は密接な関係にあるらしい⁽¹²⁾」と述べ、冷蔵庫の重要性を指摘する。石倉は冷蔵庫を「僕」の「キャラクター」と結び付けて論を進めているが、「キャラクター」以外にも、時代の移り変わりを示す「ものさし」として、冷蔵庫は機能している。「僕」は少年期に医者にかかった際、「冷たいオレンジ・ジュース」を出される。

医者の家は海に見える高台にあり、僕が陽あたりの良い応接室のソファアに座ると、品の良い中年の婦人が冷たいオレンジ・ジュースと2個のドーナツを出してくれた。(7)

言うまでもなく、「冷たいオレンジ・ジュース」を提供するためには、冷蔵庫が必要である。主人公の誕生日が一九四八年十二月二十四日であるから、医者にかかっていたと思われる一九六〇年ごろ、大卒男性の初任給・平均一万六一一五円の時代の東芝主力冷蔵庫が六万二〇〇円であることを考えると、医者の裕福さが目立つ仕掛けとなっている⁽¹⁴⁾。また鼠の「3階建ての家」の描写でも冷蔵庫は現

われる。

小型飛行機ならすっぽりと入ってしまいそうなほど広いガレージには型が古くなってしまったり飽きられたりしたテレビや冷蔵庫、ソファ、テーブル・セット、ステレオ装置、サイドボード、そんなものが所狭しと並べられ、僕たちはよくそこでビールを飲みながら気持ちの良い時間を過ごした。(28)

一九七〇年より以前のこうした冷蔵庫は、所有しているそのことがすでに、金銭的に余裕を持ちながら生きている人々を彷彿とさせるのである。

一方で一九七〇年には電気冷蔵庫の普及率は八九・一%まで高くなり、冷凍器付きの冷蔵庫も一般的に普及し始める⁽¹⁵⁾。一九七〇年の「僕」は、広告の中の冷蔵庫を眺める。

YWCAの薄汚れて陰気な建物の隣りには新しくはあるがその分だけ安手の貸ビルが建っていて、屋上には電気冷蔵庫の巨大な広告パネルが取り付けられていた。エプロンをつけた30歳ばかりのいかにも貧血病といった感じの女が前かがみになって、それでも楽しそうにドアを開けているおかげで、僕は冷蔵庫の中身をのぞき見る事ができた。

フリーザーには氷と1リットル入りのバナナ・アイスクリーム、冷凍海老のパック、2段めには卵のケースとバターにカマンベール・チーズ、ボンレス・ハム、3段めには魚と鶏のもも肉、1番下のプラスチック・ケースにはトマト、キュウリ、

アスパラガス、レタスにグレイプフルーツ、ドアにはコカ・コーラとビールの大瓶が3本ずつ、それに牛乳のパックが入っていた。

僕は彼女を待つ間、ハンドルにもたれかかったまま冷蔵庫の中身を平らげる順番をずっと考えてみたが、何れにせよ1リットルのアイスクリームはいかにも多すぎたし、ドレッシングの無いのは致命的だった。(33)

紺野馨はこの描写について、「冷蔵庫だが、日本ですべての世帯に電気冷蔵庫が普及したのは一九七五年頃だそうである。しかし一九七〇年当時、日本ではこれだけの容量の冷蔵庫にお目にかかることはあまりなかったはずだし、冷蔵庫の中身も、一九七〇年つまり昭和四五年の普通の家庭のそれは、こんなカタカナで溢れてはいなかった⁽¹⁶⁾」と述べ、アメリカ的なものが見受けられる冷蔵庫であることを指摘している。冷蔵庫に入っている食物群は、もちろんどれも単品で食べることでできるものだが、メニューを考えにくいものばかりで、内実を伴わない食品群である。「僕」が指摘するように野菜をドレッシングなしで食べるというのは難しい。この冷蔵庫には肝心かなめなものが欠けていて、「空虚」であることのたとえになっている。一方で、冷蔵庫や冷凍器の普及に伴い、人々は食材を保管するようになり、冷凍食材が流通していくのであるが、一九七〇年頃はそういった意味で人々の食生活が変わって行く時期であった。「僕」が冷蔵庫の中身をわざわざ「平らげる」ことを考えてい

るのも、こうした食生活が過渡期であることを示している。そうした中で「リットルのアイスクリームはいかにも多すぎた」と述べる僕は、時代の流れの速さに批判を加えていると同時に、ただ一人でアイスクリームを食べなければいけない自らの孤独を強く示しているとも言える。「年じゅう霜取りをしなければならぬ古い冷蔵庫をクールと呼び得るなら、僕だってそうだ(30)」という比喩からも、時代に乗ることのできない「僕」の姿が浮かび上がっている。

一九七八年の「僕」は小説を執筆しながら冷蔵庫を漁っているが、これは冷蔵庫に食料が保管されていることが前提となっている行為である。一九七四年には電気冷蔵庫の普及率は九七パーセントに達し、一九七三年のオイルショックの後には冷蔵庫は省エネルギー化・大型化が推進され、「まとめ買い」を容易にし、主婦の時間を自由にし、女性の社会進出に一役買った⁽¹⁷⁾。一九七八年の「僕」は、身近に冷蔵庫があるという共通点を一九七〇年の「僕」と有しているながらも、結婚して当時とは生活状況が違っているという外面の変化や社会状況の移り変わりといった時間の流れというものを、冷蔵庫の急速な普及や発展が示している。いわば時代と「僕」との「ものさし」の役割として、「冷蔵庫」は存在している。

「風の歌を聴け」が発表された年で、「僕」の小説執筆時から是一年後にあたる一九七九年には日本の冷凍食品生産量が五〇万トンを超え⁽¹⁸⁾、日本人にも冷凍食品は馴染みのものとなっていくが、冷凍食品の代表である「フライド・ポテト」を、ジェイズ・バーのジェイ

は手作りで提供する。

僕は背いてバスに乗り込み、21番のC席に座ってまだ暖かいフライド・ポテトを食べた。(38)

平居謙は、「一人で食べるまだ暖かいフライド・ポテト。「まだ暖かい」というところが肝心で、冷たく冷え切ってはいいのです。けれども揚げたてのあつあつでもありません。どこか時間が経てしまったもの⁽¹⁹⁾。」と述べ、「喪失感を強く言い当てている」ものとして「まだ暖かいフライドポテト」を挙げていますが、暖かさは同時に他者（ここではジェイ）との連携がもたらす期待も読みとることができらるであろう。ジェイは一九七八年の時点でも「毎日バケツ1杯の芋をむいている(38)」が、これは冷蔵庫のように変化していくものとは対照的に、変化しないものの例としてあげられよう。

四 僕のついた「嘘」

最後に、度々議論になる「3番目の女の子」との会話の場面を読み解きたい。「風の歌を聴け」は冒頭から「正直に語ることはひどくむずかしい。僕が正直になろうとすればするほど、正確な言葉は闇の奥深くへと沈みこんでいく(1)」というふうには、コミュニケーション不全の問題が浮き彫りとされているが、「3番目の女の子」との場面における齟齬には、そうしたコミュニケーション不全が象徴的にたち現われている。34章において、「僕」に対して「3番目

の女の子」は、「私を愛してる?」「結婚したい?」「子供は何人欲しい?」と立て続けに質問をし、僕はそれに答えていく。しかし「3番目の女の子」は「コーヒーで口の中のパンを嚙み下してから」「僕」の方を見て「嘘つき」と言う。それに対して僕は「彼女は間違っている。僕はひとつしか嘘をつかなかった」と述べた。

「僕」のついた「嘘」が何であるのかは、多くの論者が考察しているところである。芹澤はもは「自殺した彼女は亡くなる半年ほど前、「僕」に子どもは何人欲しい?と訊ねる。「3人」と答えると、「嘘つき!」(P134)と返す。この場面は、小指のない女の子と同じように彼女が墮胎したと読み取ることができないのではないだろうか⁽²⁰⁾と述べ、子供の人数に焦点を当て、喜谷暢史は「34」の会話をたどれば、「僕」が答えた後半の返事は、一般的な結婚や生活への願望であり(「もちろん結婚したい。」「3人。」「女が2人に男が1人。」「嘘」ではない。最大の「嘘」は「ねえ、私を愛してる?」に対する「もちろん。」でしかない⁽²¹⁾と考える。こうした論点が多いのに対して、石原は「チャプター34で「僕」のついた嘘とは、サンドウィッチに使う「芥子」がないという彼女に対して、「上等さ」と言ったことだということになる⁽²²⁾と考察する。「3番目の女の子」が立て続けに質問をする少し前には、〈食〉に関するやりとりがある。

去年の秋、僕と僕のガール・フレンドは裸でベッドの中にもぐりこんでいた。そして僕たちはひどく腹をすかせていた。

「何か食べ物は無いかな?」僕は彼女にそう訊ねてみた。

「搜してみるわ。」

彼女は裸のまま起き上がり、冷蔵庫を開けて古いパンをみつけたし、レタスとソーセージで簡単なサンドウィッチを作り、インスタントのコーヒーと一緒にベッドまで運んでくれた。それは10月にしては少し寒すぎる夜で、ベッドに戻った時には彼女の体は罐詰の鮭みたいにつきり冷えきっていた。

「芥子はなかったわ。」

「上等さ。」

(中略)

「ム……。」彼女は口にパンを頬ばったまま人間の誇りについてしばらく考え込んだ。いつものことだが、彼女の頭の中でいったい何が起きているのか、僕には想像もつかなかった。

(34)

石原の言うように「芥子」とまでは限定せずとも、「インスタントのコーヒー」と共に食す、「芥子」が無い「古いパン」で作った「サンドウィッチ」が「上等」であるとは考えにくい。ここでの「嘘」とは「サンドウィッチ」に対して「上等さ。」と答えたことに他ならない。であるとすれば、上述の場面はどのように読めるのであろうか。

この場面は「ひどく腹をすかせていた」二人の「空腹」から始まる。ここでの「空腹」とは、両者の、お互いに対する欲求、あるいは他者に対する欲求を示している。この「古いパン」の「サンド

ウィッチ」を「上等さ」と言ったのは「僕」の優しさでもあった。しかし、「3番目の女の子」もその「サンドウィッチ」を口にして、「ム……。」とつまらせるような「サンドウィッチ」であることを理解し、すぐさま「僕」の嘘がわかってしまう。この時点で「3番目の女の子」にとって「僕」は自分の意見をさらけださない人物として「嘘つき」のレッテルが張られてしまう。その後の「愛」や「結婚」や「子供」の話について「僕」が正直に話そうとも、「3番目の女の子」にとっては全てが「嘘」に聞こえてしまう。そして「コーヒーで口の中のパンを嚙み下してから」「嘘つき！」と彼女は言うに至るのである。「僕」の人間性そのものを「嘘つき」な存在として認識してしまう。コミュニケーションを円滑にしようとした「僕」のささやかな「嘘」と、対話から真実を求めようとする「3番目の女の子」との間にデイスコミュニケーションが起きてしまっているのである。

この一件が「僕」に「真実」を伝えるのが困難であることを植えた。その後「小指のない女の子」が自分で服を脱いだことを「信じられないわ」と言ったことに対して「信じるしかないさ」と「僕」は答えるが、ここには「真実」を伝えることへの諦めがみとれる。「3番目の女の子」との出来事は、「僕」にとって終始尾を引いているのである。

ひとつの注目すべき点は、この悲劇は「古いパン」がなければ二人の齟齬が発覚しなかったかもしれないという点である。パンの保

存方法として望ましいのは、冷蔵保存ではなく冷凍保存である。二人が一緒にいた部屋の「冷蔵庫」に冷凍器や冷凍室があれば、事態は変わっていたかもしれない。一九七八年の時点から回想しながら文章を書いている「僕」にとって、ここでも冷蔵庫の急激な発展と過去の記憶は結びつき、それぞれが現在との距離をはかる「ものさし」として働いているのである。

五 おわりに

以上のように、「風の歌を聴け」において〈食〉は重要な意味を持っていた。一つには、確実にシェアを伸ばしてきた「ビール」や、高度経済成長を示す家電の代表格である「冷蔵庫」等の〈食〉に関する当時のあり方が日本社会の変動と密接に関係しており、そうした社会の中に「僕」は囚われながらも、一方で距離を置いた場所に位置づけられていることを認識させる。「ビール」などの横文字の食材はたしかにアメリカを思わせるものではあるが、日本国内の独自の時代発展状況を示すものとしても存在している。「ビール」の銘柄が明かされないのも、そうした国内外の両方を射程とすることを可能としている。また「冷蔵庫」の時代状況を本作の時間軸と照らし合わせることによって、「僕」と外界との距離をはかる「ものさし」として「冷蔵庫」が作用していたことがわかる。急激に発展する「冷蔵庫」、ひいては日本社会とは対照的な、変化の乏しい「僕」

の様子が浮き彫りとなっている。

また二つ目には、「空腹」や「消化不良」も含めて、「食」そのものが持つ効能やイメージが、登場人物たちの動きと絡み合っていることも指摘できる。「冷蔵庫」を「クール」さに譬えた「僕」自身の発言により、数多く現われる「冷蔵庫」はわかりやすく作品全体にそのまま「クール」な印象をもたらしているが、さらには、作中に現われ続ける「ビール」は物語全体に停滞感を蔓延させ、「空腹」や「消化不良」といった生理現象は「僕」の抱える「空虚感」や「満たされなさ」を表出している。

「風の歌を聴け」において〈食〉は単なる小道具ではなく、作品を逆照射する重要な確固たる要素として存在している。こうした〈食〉の描かれ方を分析することは、政治状況などが示すマクロな社会状況といった視点と、各個人の生存のためには必要不可欠な営みとしてのミクロな視点、この両面からテキストを捉えることを可能にする。〈食〉を通して従来の研究とは違った角度から眺めることで、より多面的に社会状況と登場人物たちとの関係性を見出し、また「僕」の心情など、空白の多い本テキストの新たな解釈が可能となるのである。

注

(1) 丸谷才一「新しいアメリカ小説の影響」〔『群像』一九七九年六月〕

(2) 上田三四二、三木卓、菅野昭正「創作合評」〔『群像』一九七九年七月〕

(3) 土居豊「村上春樹を読むヒント」(KKロングセラーズ、二〇〇九年一月)

(4) 「キリン 酒・飲料の歴史」二〇一九年八月二日閲覧 https://www.kirin.co.jp/entertainment/museum/history/kaizetsu/bk_06a.html

(5) 「アサヒビールの120年 その感動を、わちあう。」(アサヒビール株式会社、二〇二〇年一月)

(6) 三浦雅士「村上春樹とこの時代の倫理」〔海』一九八一年一月〕

(7) 山田夏樹「風の歌を聴け」における「歴史」化と〈空白〉(『村上春樹と一九八〇年代』おうふう、二〇〇八年一月)

(8) 石倉美智子「風の歌を聴け」論——「霜取りをしなければならぬ古い冷蔵庫」としての「僕」(『専修国文』一九九四年一月)

(9) 前田愛「僕と鼠の記号論——二進法的世界としての『風の歌を聴け』」(『国文学 解釈と教材の研究』一九八五年三月)

(10) 坂上正一編著『風雲家電流通史』(日刊電気通信社、二〇一四年一月)

(11) 注(8)に同じ。

(12) 注(8)に同じ。

(13) 「戦後昭和史―電気冷蔵庫の価格推移」二〇一九年八月二日閲覧 <https://showashi.com/transition-refrigerator.html>

(14) 電気冷蔵庫の普及率は一九五七年の二・八%から一九六〇年の一〇・一%へ増加していくが、未だ各家庭に普及していたとは言えなかった。村瀬敬子「冷たいおいしさの誕生 日本冷蔵庫100年」論創社、二〇〇五年一月

(15) 青山芳之「家電」(日本経済評論社、一九九一年一月)

(16) 紺野馨「村上春樹——『小説』の終わり」(桜美林学園出版部、二〇一三年三月)

(17) 村瀬敬子「冷たいおいしさの誕生 日本冷蔵庫100年」(論創社、二〇〇五年一月)

(18) 「冷凍食品の歴史 冷凍ONLINE」二〇一九年八月二日閲覧

<https://online.reishokukyo.or.jp/learn/naruhodo/detail/history.html#ath>

(19) 平居謙『村上春樹小説案内 全長編の愉しみ方』(双文社出版、二〇一〇年五月)

(20) 芹澤ばも「記念すべきデビュー作『風の歌を聴け』」(『村上春樹 全小説ガイドブック』洋泉社、二〇一〇年十二月)

(21) 喜谷暢史「十九日間の〈物語〉から〈小説〉へ——村上春樹『風の歌を聴け』再読——」(『日本文学』二〇一三年三月)

(22) 注(8)に同じ。

村上春樹「風の歌を聴け」に現われる〈食〉